

一 次の問いに答えなさい。

問1 — 線部を漢字に直しなさい。ただし、送りがなの必要なものは、それもふくめて書きなさい。

- ① お年玉を銀行にヨキンする。
- ② ヒソウの品を見せる。
- ③ ようやく春がオトズレタ。

問2 — 線部の読みを、ひらがなで答えなさい。

- ① 量を均一にする。
- ② 虫を素手でつかむ。
- ③ きげんを損ねる。

問3 「街」という漢字の部首名を、次から選びなさい。

- ア がんだれ イ ぎようがまえ
- ウ れんが エ そうによう

問4 「あげ足をとる」の意味として、もっともふさわしいものを、次から選びなさい。

- ア 他人をうまくだます
- イ わざとけんかをしかける
- ウ 失言をとらえてなじる
- エ 急に人をおどろかせる

問5 「向上」と同じ意味の言葉を次から選び、漢字に直しなさい。

ドウイ・ホシユ・シンボ・カド

問6 次の — 線部を正しい言い方に直すと、どのようになりますか。もっともふさわしいものを後から選びなさい。

母が校長先生によろしくと言っておりました。

- ア 申して イ 申されて
- ウ 言われて エ おっしゃって

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 に 答 え な さ い 。

① LINEと「井戸端会議」はどう違うのか

「自分自身の場合、親や友だちとの連絡、動画鑑賞、ゲームアプリ等の娯楽がAな役割です。(中略)SNSは友だちでも知人でも知人ではない人でも誰とでもネットを通してつながることが出来ます。僕はちなみにスマホを使って四年目なんです、使い始めの頃はというと『絶対、LINEは業務連絡しかしないよ』なんて親や友だちに言っていました。それから四年たち、気づけば僕にとってLINEは友だちとつながる絶好のアプリと化しました。↓情けない！(中略)つまり僕の心の中に誰かといつもつながっていたい、孤独な状態はいやだ！ひとりはいやだというような感情・考えがAなものにしてしまったから、SNSが使えるスマホがあたりまえのものになったのだと僕は思います」

私は、大学の講義でスマホ依存について話すことが多いのですが、ある男子学生は講義内容をうけて、レポートにこう書いていました。彼にとって、スマホは「あたりまえ」のものであり、LINEなどのソーシャルネットワークサービス(SNS)を使って、つねに親しい人や知人、知人ではない人につながるための重要なメディアなのです。

ゲームや動画鑑賞は、時間つぶしか暇つぶし、趣味の時間の延長線上でスマホとつきあっていると考えることができるでしょう。し

かし、SNSを使って誰かとつながっていないと「孤独」であり、「孤独」はいやだ、という感情をもたざるをえなくなったというのは、まさにスマホが彼にもたらした固有の新たな「生の状態」だと思ふのです。

LINEは確かに「業務連絡」するには、便利なツールです。ある集まりのなかでの情報伝達、情報共有を効率よく達成できると私も思います。「業務連絡」のツールであつたはずが、彼のなかで、いつしか、LINEは親しい人、知人、赤の他人とつながるためのツールへと変貌していったようです。もつと言えば、つながるためではなく、「つながっていること」自体を確かめるためだけの、「つながっていたい」という意思や感情を確かめるだけのツールへと変貌していったのでしょうか。

誰かとつながっていたいと思いLINEを使うとき、私たちはどのような話を相手にしているのでしょうか。別に大した話ではない、ただの雑談だし、いちいち覚えておくほどの内容ではない、という返事が聞こえてきそうです。そんな長い文章は書かないし、面白いスタンプがいっぱいあるし、スタンプをうまく使えば、相手にいちいち言葉を使わなくても、自分の気持ちは伝わるし。こんな返事も聞こえてきそうです。話の中身じゃないよ、LINEでやりとりすること自体が面白いし、意味あることなんだ。こんな返事も聞こえてきそうです。いろいろな返事の可能性を考えていると、私のなかで「井戸端会議」という言葉が浮かんできました。

「井戸端会議」とは何でしょうか。近所に住んでいる奥さんたちが、井戸端に集まって、皿を洗ったり、野菜を洗ったり、洗濯したりしながら、雑談し、談笑する。そこにいない人の悪口や噂で盛り上がったたり、そうかと思えば、普段の暮らしの厳しさやしんどさを愚痴る、その意味で重い雑談になったりする。いずれにしてもまさに親しい人や知人が集まり、つながる場であり、語り合うという実践でした。

②「でした」と私は過去形で語っていますが、まさに過去の情景と言えるでしょう。なぜなら私たちの日常生活で、もはや「井戸」はあたりまえのものではないのです。でも私が子どもの頃であつた昭和の時代までは生活の場に「井戸」は存在しました。炊事や洗濯など生活に必要な水を得るために、近所の人々は「井戸」を共有し、「井戸」を活用しました。当然のごとく、そこには人々が集まることになり、語り合いが生まれたのです。

ところで、相手と他愛もない話をしたり雑談しているという点でLINEでのやりとりと「井戸端会議」は、同じでしょうか。私は大きく二つの点でこれらは異なっていると思います。

一つは、直接対面してやり取りしているか否かという点です。「井戸端」はまさに、近所の人たちが集まってくる場所で、人々はお互いの様子や表情を確認しながら雑談します。このとき、相手の様子を見て、表情を見て、何を感じ、考えているのかを推し量りながら、楽しい話で盛り上がりたりするものです。まさに直接的

③で対面的なコミュニケーションの醍醐味や面白さが実感できるでしょう。

今一つは、そこで実際に暮らしている人々から決して切り離すことができない日常的な営みであるか否かという点です。先に述べたように「井戸」は暮らしに絶対欠かすことができない「水」を得ることができる重要な場所です。

ただ、そこが暮らしに根ざした「井戸端」という象徴的な場所であり、直接的な対面のコミュニケーションが基本だという点でLINEでのやりとりとは異質だと思ふのです。

C
このように書いてきて、私は別にLINEでのやりとりがだめだと言いたいのではありません。問題はやはり先の男子学生がわかっているように、LINEというツールが他者との「つながり」それ自体を確認するために使われていることであり、ツールに自分自身が囚われLINEでの「確認」に依存しないと他者との「つながり」を実感できなくなっている身体になっていることであり、また他者どこかで「つながっていない」こと自体が「孤独」だと思ふ込んでしまっている姿なのです。

男子学生に私はこうたずねてみたいと思います。いつも何らかの形で他者と「つながって」いないと、本当に孤独なのでしょうか。

LINEでやりとりすることであなは本当に他者と「つながって」いると実感し安心しているのでしょうか。SNSを通じた他者との「つながり」はあなたに「孤独」ではないどんな心の状態をもたらしているのでしょうか。そもそもあなたがイメージしている「孤独」とは、どのようなことをいい、他者との「つながり」とはどのような関係性のことをいうのでしょうか、等々。とりあえずこのあたりでやめておきますが、もつといろいろな形で問いかけることができるとしよう。

こうした問いに対して、私たちは、どのように考えていけばいいのでしょうか。はつきりしていることがあります。LINEにせよ、ツイッターにせよ、インスタグラムにせよ、ましてやスマホにせよ、それらはあくまで便利な情報発信、情報収集、情報流通の技術であり道具にすぎないということです。こうした技術や道具に意志はありません。LINEが意志をもち、自分をないがしろに使った人間たちを「孤独」にしてやろうと考えれば、それはそれでなかなか怖いことだと思えます。

問題は、やはりこうした道具を私たちがいかに使いこなすかであり、使いこなしの背後にある他者理解、他者とのコミュニケーションをどう考えるのかということなのです。

私はこう思います。親しい人たちといつでもどこでも簡単に「つながる」ことができるのは、無条件に喜ぶべきことであり、私が生きていくうえで楽しいことなのだろうか。他者をどのように

理解し、他者とどのように交信できるのかという問題を考える営みは、まさに社会学の中心を構成します。そして、ジンメルが喝破[＊]しているように、他者という問題を考える核心は、人間のあいだにある「関係性」であり、「距離^{きょり}」なのです。

そして、さらに私がつけ加えたいのは、他者と交信し他者を理解しようとするときに、どうしてもかかってしまう「時間」であり「速度」なのです。インターネットで情報検索^{けんさく}するとき、速ければ速いほど、便利だし、私たちはすごいと思います。しかし他者と交信したり他者を理解しようとするとき、それにかかる速度や時間は、同じように速ければ速いほどいいのでしょうか。

他者と真に「つながりたい」。これは誰しもがもつ願いだと思えます。この願いをかなえたいとき、私たちは、相手のことを慎重^{しんちょう}に時間をかけて考え、相手が何を感じ考えているのかをゆつくりと見つめ、想像し、相手の心や世界に至ろうとするのではないのでしょうか。いわば情報検索のように他者と「さくさく」と「つながる」ことはできないのです。仮に「さくさく」と「つながっていると自分が感じているとしても、その実感の中身をいま一度、見直す必要があるのではないかと思うのです。

他者と真に「つながりたい」という願い。それをかなえるためにも、こうした他者と自分とのあいだにある「距離」や「時間」を考へるべきだし他者理解のための「速度」を考へるべきです。そのうえで私たちがいかに他者と簡単には「つながれない」のかをじつく

りと考える必要があるのです。

LINEで相手との短い言葉やスタンプのやりとりをいくら楽しめているとしても、そのことだけで他者と「つながりたい」という願いはかなえられないのです。

(『「今、ここ」から考える社会学』好井裕明)

*SNS:インターネットを通じて、他人とコミュニケーションをとる

ためのサービス。LINE・ツイッター・インスタグラムなど。

*スマホ:スマートフォンの略

*喝破:大きな声で他の説をやぶり、真理をときあかすこと。

問1 ― 線①「LINEと『井戸端会議』はどう違うのか」とありますが、両者の違っている点を本文中から二つ書きぬきなさい。

問2 ― Aには、同じ言葉が入ります。入る言葉としてもつともふさわしいものを、次から選びなさい。
ア 不可解 イ 不可能 ウ 不可視 エ 不可欠

問3 ― 線②『『でした』と私は過去形で語っています』とありますが、なぜですか。その理由を本文中の言葉を使って答えなさい。

問4 ― 線③「醒醐味や面白さが実感できる」とありますが、醒醐味や面白さはどこにあると筆者は考えていますか。もっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア ふだんなかなか会うことのできない相手と、気をつかわずに他愛もない話をしたり雑談できたりするところ
イ 近所の者同士が生活に根ざした情報を得るために、「井戸」を共有し、自分たちの生活に活用していたところ
ウ 相手の様子や表情を実際に見て、相手の心の動きを思いやりながら、コミュニケーションがとれるところ
エ 「井戸」という暮らしに根ざした場所に、自然と人々が集まることになり、語り合いが生まれたところ

問5 ― Bにあてはまるように、次のア～ウを並べかえなさい。

ア もちろん近所の人と雑談したくて人々が「井戸端」に集まってくるからこそ「会議」が成り立っているのかもしれない。

イ すなわち「井戸端会議」とは、人々の暮らしから遊離した、どこか遠い空間で起こる営みではなく、常に、人々の暮らしに根ざし、人々の生活臭や生活実感（しやうまん）が充満した日常で起こる営みと言えます。

ウ そして近所の人々は「水」を得るために「水」を使うために「井戸」に集まり、そこで「会議」が始まってしまうのです。

問6 ― Cに入る小見出しとして、もっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 他者との「関係性」のために、本当の「孤独」について考えよう

イ 他者との「距離」や他者理解のために、情報発信や情報収集をしていこう

ウ 他者との「距離」や他者理解のための「時間」や「速度」を考えよう

エ 他者との「関係性」のために、情報ツールを使って「つながり」を楽しもう

問7 ― 線④「LINEにせよ、ツイッターにせよ、インスタグラムにせよ、ましてやスマホにせよ」とありますが、これらを別の表現で言いかえたものを本文中から五字で書きぬきなさい。

問8 ― 線⑤「さくさくと」とありますが、この表現にふくまれる意味を、次から選びなさい。

ア 適切に イ 容易に ウ 親密に エ 多様に

問9 本文の内容としてもっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 他者との真のつながりは、LINEでの手軽なやりとりではなく、じっくりと相手の気持ちや考えに向き合うことから始まる

イ LINEでつながりを「確認」したつもりでも、実際におたがいの様子や表情を確認していないから、「距離」は縮まらない

ウ 短い言葉のやりとりしかできないLINEでは、他者とのつながりを実感するために、深刻なスマホ依存になる可能性がある

エ 他者と親しくつながるためには、今よりもLINEにかけ「時間」を短くして、対面のコミュニケーションを多く持つ方が良い

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

アリとニンゲン

夏休みのあいだはサッカー部の合宿練習があり、高校入試のための集中補習があり、毎週一回のプール登校があった。

そのあいだ^①の早い夏台風のわりあい大きなやつがひとつやってきて、けつこう暴れまくり、ぼくの家も果実のなる木が何本か被害を受けた。

そうして予定よりも早く、ぐうちゃんが帰ってきた。今度もメコン川のときぐらいの真っ黒けぶりになっており、少し痩せたみたいだった。でもいつものように元気そうだった。仕事上の収穫があり、予定よりも三日早く帰国できたのだと嬉しそうに言った。ぼくも嬉しかった。

八ヶ岳キャンプの準備のために、また二人で買い物に行くことになった。今度は電車だった。

新宿に着くまでも電車のなかでぐうちゃんはしきりに感心していた。電車は六割ぐらいの混みようだったから通勤ラッシュのときから比べたらまったく平和な車内だったけれど、ぐうちゃんはなにかしきりに考えごとをしている顔だった。

ちよつと心配になつてぼくがぐうちゃんの顔を見ると、「静かだねえ。これだけの人が乗っているのにみんな黙っているんだもの。あらゆる生物のなかでこういう状況^②は考えにくい。人間はたくさんの言語能力を持つているから一番騒々しい生物、と思っ

ていたけれど、こうなると一番静かであるのかもしれないね。だから何か無理を感じる。自然でないものをね」

そういうことをぼくに聞こえるぐらいの低い声で言った。

「それは空気の伝導率が悪い、ということとも関係しているかもしれない。イルカなんかだと、とくにベルーガ（シロイルカ）などは三、四キロ四方ぐらいみんな聞こえてしまうというから海のなかは実に騒々しいんだよ。海のカナリアなんて言われているからね。みんなでなにかしら常に情報交換^③しているらしいんだ。イルカのその騒々しさと張り合えるのはそこで四、五人集まって話をしている人間のおばさんぐらいかもしれないけれどね」

ぼくたちのまわりにもおばさんが何人かいた。今はみんな一人ずつのようだったからいいけれど、それでもそんな話が聞こえてしまう^④とちよつとやばい。

新宿駅に降りるとぐうちゃんはずっと電車のない土地にいたので、コンコースを上から見渡せるところに立ち止まり、なんだか田舎からはじめて都会にやってきた人みたいにあちこち眺めまわし、「やっぱり東京の人は動きが速いなあ。これだけたくさんの人がそれぞれ独自の目的をもってそれぞれいろんな方向をむいて好きな方向にあの速さで進んでいくのに、正面衝突^⑤している人がいないのもすごいよねえ。もし真上から見るとモニターがあつてそれを一日観察していても、たぶん衝突するところなどほとんど見えないだろうね。アリの場合はこういう状態になると必ずぶつかる。わざとぶつ

かるというか、その場合はわざと接触^⑥しているんだだけだね」

ぐうちゃんは大都会にきて人間とアリを一緒にしている。そこに立ち止まったまま、まだぐうちゃんの話は続いた。

「アリが接触しているのは触覚^⑦だけれど、それで瞬間的に情報を交換しているんだよ。同じ巣に所属しているものか、どこに集めるべき獲物があるか、帰路の方向はどっちか。そういう情報を一瞬のうちに交換している。もし人間がそれだけのものを情報交換しようとしたら、まずそこらの喫茶店^⑧かなにかに入つてじっくり話をしないと難しいだろうね。最初は儀礼^⑨としての挨拶が必要だ。今日の天気などの話もしなければならぬ。お互いにわかつている情報の交換からまずは始めるから情報交換能力ということになるとアリよりも劣^⑩っているかもしれないね」

新宿の、これだけたくさんヒトがいるなかで、人間よりアリのほうが優れている、なんて話をしてるのはぼくたちぐらいなものだろうな、と思った。

でも、ぐうちゃんは言った。

「アリの一匹^⑪ずつは本当に小さな脳と神経しか持っていない。その小さな脳を、どこかにいる巨大で優れた脳が指導とか誘導^⑫しているというわけでもない。同じような思考能力のアリがたくさん集まって集団で行動を決めているんだ。これを『集団脳』というんだよ。素晴らしいのか、単純すぎて気の毒なのかわからないんだだけだね」

ぼくはアリの行動はすべて巣穴のなかにいる女王アリが指令をだして、そのもとで行動しているものとばかり思っていたのだが、^⑬どうも違うらしい。考えてみたらもし女王アリが指令をだすといつてもどういう方法でだしているのかぼくにはわからない。電波のようなものを出している、なんて言ったらマンガ脳みたいと思われるだろう。

「^⑭こういう風景と正反対なのは、やはり集団脳のホタルかなあ。

ずっと以前にニューギニアの山奥^⑮で土地の人に案内されたホタルの木は美しかった。真夜中、山奥の、一か所がぼおつと光っているんだ。近寄ってみるとそれは何万匹とも知れぬホタルの群れが一本の木にたかっているんだね。それだけでも素晴らしい風景なのに、ホタルの光が、同調しているんだ。点滅^⑯がバラバラではなくて一斉^⑰なんだ。木にとまっているのもまわりを飛んでいるのも、みんな同じタイミングで点滅している。最初ぼくはクリスマスが近づいたりすると盛り場で立ち木に小さなランプをいっぱいつけて同調点滅させているイルミネーションかと思つたくらいだったけれど無人の山奥にそんなものつけるわけがないから、あれはホタルたちが自発的にやっていることだと理解した。あとで帰国して調べてみるとそれも『集団脳』によるものだったんだ。集団脳はコンピュータと相性がよくてやがてサイバネティクス（いろいろな考え方が生物と機械を連係させてコントロールする方法などが研究されている）などの未来産業で利用されていくかもしれないね。我々の生活だっ

てうかうかしているとアリやホタルみたいなAの一パーツにされてしまう可能性がある。携帯電話依存症などもそれに近いかもしれないよ」

やがてぼくたちは今日の用事をすませるためにコンコースの雑踏のなかに入ってしまった。ぐうちゃんのいうようにみんなバラバラの方向にすごいスピードで移動しているけれど、混沌としていながら整然としている。ぶつかりそうになってもそれぞれ何かの競技のように直前でたがいに見事に身をかわしていく。

たまに肩など接触することがあるけれど、互いに気がつかなかったのかな、と思うぐらいに黙ったままだ。外国だとそういうとき「失礼」の言葉がある。それがないのが日本なんだ、ということはだいぶ前にぐうちゃんから聞いたことがある。

双方の「失礼」のコトバがあればもつと気持ちよく対人関係を作れるのに日本人は「無視」もしくは「なかったこと」にしてしまう。それがストレスを重ねない消極的な精神技術になるのか、逆に無意識のうちにストレスを重ねていることであるのか、それには個人の感覚差とか認識の差があるから、いちがいには言えないけれどね、とぐうちゃんは言う。

ぐうちゃんの話聞いてみると、いままでなんとも思わずに過ごしていたことが、急になんだかタダナラヌことになってしまいううでいつも油断ならないのだが、その現場でそれに合った話をされる

と実にしつかりした実感をともなってくるのも事実だった。

『アイスプラネット』椎名誠

問1 — 線①「気の早い夏台風のわりあい大きなやつがひとつ

やってきて、けっこう暴れまくり」とありますが、同じ種類のたとえを使ったものを、次から選びなさい。

ア まるで絵のように美しい風景だった

イ 波の音が、ぼくたちをさそっていた

ウ 君はぼくの太陽だ

エ 動かざること山のごとし

問2 — 線②「しきりに考えごとをしている顔だった」とありま

すが、考えている内容としてもっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 日本の通勤ラッシュの大変さについて

イ 不自然なまでに静かな車内環境について

ウ コミュニケーション力の低い日本人について

エ 日本人やベルーガのマナーの良さについて

問3 — 線③「ちよつとやばい」とありますが、なぜですか。そ

の理由としてもっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア いつも情報交換をしようから

イ 海のカナリアになつてしまうから

ウ ぐうちゃんの話はおばさんに失礼だから

エ 空気の伝導率が悪くなつてしまうから

問4 — 線④「人間よりアリのほうが優れている」とありますが

が、どのような点がすぐれているのですか。十五字以内で答えなさい。

問5 — 線⑤「どうも違うらしい」とありますが、何が違ふと

思っていますか。解答らんに合うように、本文中から十字で書きぬきなさい。

問6 — 線⑥「こういう風景」を説明したものとして、もっとも

ふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 他人と同じ思考をもつ人間同士が新宿にたくさん集まつて、ぶつからないようにマナーを守って行動する風景

イ 目的地に急ぐ多くの人たちがバラバラの方向に動いているので、周囲の人にぶつかつてめいわくをかけている風景

ウ 独自の目的をもつたくさんの人が好きな方向に速い速度で進んでいるのに、正面衝突している人がいない風景

エ 全員が「女王アリの指令」のようなものを感じながら、目的を達成しようと動き回っている都会の風景

問7 Aに入るもっともふさわしい語を、本文中から三字で

書きぬきなさい。

問8 — 線⑦「消極的な精神技術」を説明したものとして、もっ

ともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア 日本人同士がその場の状況に応じて必要なコトバをつかいながら、コミュニケーションをとろうとすること

イ 気持ちのよい対人関係を作れることを重視しないで、個人の感覚差や認識の差で必要なコトバをつかうこと

ウ ストレスを重ねないために、その場に応じたコトバをつかったり、コトバをつかわずに「無視」したりすること

エ 気持ちよく対人関係を作れるはずのコトバをつかわず、

「無視」もしくは「なかったこと」にしてしまうこと

問9 — 線⑧「事実」とありますが、「ほく」にとっての事実と

してもっともふさわしいものを、次から選びなさい。

ア ふだん見過ごしていたなにげない出来事が、ぐうちゃんの体験談を聞くと、とても危険なもののように感じられるということ

イ ぐうちゃんがいつも話してくれるぼくの知らない世界の出来事は、実際に目の前で起きていることだと感じられるということ

ウ 新宿の人ごみにいると、いままでなんとも思わずにいたぐうちゃんが油断のならない人物のように実感してしまうということ

エ ストレスのない生き方をしてきたぐうちゃんの言葉には、新宿にいる人たちにはない不思議な力があると実感してしまうということ

